慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	P・コールス イタリーにおける初期資本主義の挫折に関する覚書
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.7 (1953. 7) ,p.571(79)- 573(81)
JaLC DOI	10.14991/001.19530701-0079
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530701-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ところは少くないであろう。

配給費削減の第二の方法としては配給機能の遂行における時間的浪費の排除を目的とする配給操作の改善が指摘せられている。即ち「財貨の物理的移動を急速ならしめんとする新たな手段の發見利用又は、現存手段の十分な利用は、利子、倉庫費、その他多く配給費を節約することに役立つであろう」し、此の目的のためには鐵道その他の交通機關の進歩に俟たなければならない部分が多いが、そのスピード化が配給能率と關聯する重要な側面は、「商品の供給地から遠くはなれた場所に位置する商人にとつて商品廻轉率改良の可能性を與える」ことである。配給が現存する需要を充足することのみならず、需要創造と云う積極的側面をもつ限り生産と販賣の間の時間的隔離は不可避的であろうが、しかしそれも販賣促進のための追加販賣費の適期支出に依つてこの隔離を極少ならしめることも亦不可能ではない。

更に配給費の節約には配給業者以外に生産者も亦その責任の一半を負わなければならない。財貨が「眞の商業的成功」を收めるためにはその財貨の性能の高いことは勿論であるが、その設計が實際の利用に適合しうる如くたてられなければならない。又部分品の標準化が缺けていることが販賣の障害であつた例も少くなく、設計の拙さと部品標準化の缺除は、多額の販賣費を要求することとなり、此の點においては高配給費の責めはまさしく生産者が自ら負わなければならないであろう。

從來高配給費が批判の對象とせられるときには殆んど常に「廣告業者・小賣業者」そして「中間的配給業者」がその責の大部分を負うべきものとせられ、「公衆が要求するサーヴィス・わが經濟構造が必然的に要求する配給機構の複雜性・經濟的自由に伴う費用」については全く省みられることがなかつた。スチュアート及びデューハースト兩氏に依る一九二九年の配給費に關する廣汎な調査の結果は、たしかに小賣商業における費用が一三〇億ドルの莫大な額にのぼることを示しており、この額を卸商業の七〇億ドルと比較するとき一見そこから小賣商業の非能率が結論せられるかの如くではあるが、しかし配給費の判斷はそこに遂行せられている機能の質と量との關聯の下になさるべきであろう。卸商業及び小賣商業における販賣の相異性が無視せられることは決して少くなかつた。例えば小賣商業における掛賣乃至配達制度は配給費を増大せしめる大きな要素ではあるがもしかりにそれらが消費者に轉嫁せられたとすれば、配給費の減少は明らかであろうが、それに伴う煩勞は消費者自身の負擔となり、それは單なる小賣業者から消費者への費用の移轉にとどまり社會的にプラスせられるものは何等存しないであろうし、掛賣乃至配達制度そのものが非難の對象とせられるならば非難せらるべきは小賣業者よりもむしろかかるサーヴィスを要求する消費者自身でなければなるまい。われわれが配給費の削減の方向に向つて前進せんとするならば、「配給費問題の複雜性・生産者の相對的責任・配給費に對する商人及び消費者の相互の理解」こそ先ず先決問題でなくてはならない。

アメリカの如き自由經濟におけるその基本目的が「自由經濟組織を維持し發展せしめるに足るだけの利潤を實現するに必要な生産をあげること」であるとするならば、低配給費の達成それ自體は何等の意義をもちえないであろう。何故ならば最少の費用に依る財貨の配給が最大限の販賣と從つて利潤とを提供するとの保障は何等與えられていないからである。要するに配給費は相對的なものであり、その社會の購買力の大小に依存し、顧客が要求し且つ進んでそれに對する支拂を肯定するそのサーヴィスの量と質に依つて即ちその社會の生活水準に應じて決定せらるべきであり、その能率の判斷も從つて一定の配給費でなされた、配給の機能とサーヴィスの觀點からなさるべきものであろう。

「大量生産は大量配給を要求する」と言う言葉は極めて興味深い虛飾語ではあるが、しかし生産物の最終的配給は一個人に對してなされるのであり、しかも配給の目的が、一億三千萬以上にも達するこれら個々の消費者の「必要や欲望やそして氣まぐれ」さえをも滿足させることにおかれている限り、かかる非機械的機能に對する費用が純粋に生産の機械的機能に對する費用をはるかに上廻るものであつても決して不思議とするに當らないであろうし、「此の生産と配給の兩者の相違を混同する程吾々は愚かであつてはならない」と。（片岡一郎）

論文紹介

P・コールス『イタリーにおける初期資本主義の挫折に關する覺書』

Paul Coles, "A Note on the Arrest of pre-Capitalism in Italy." Past & Present, No. 2 November 1952. pp. 51-54.

東方貿易の進展と共に、イタリー諸都市は繁榮期を迎へることが出來た。沿岸の諸海港が抬頭したばかりではない。內陸の諸都市も亦各種産業の興隆に依つて進出した。特に第十五世紀における發展が目覺しく、豐かな經濟力に依つて一時は他の追從を全く許さなかつた程であつた。

ヴェニスにおいては、「造船・硝子製造及び更紗の模樣附が主要産業となつた。」「特に法王領においては鑛山開發が進み、又フロレンス、ルカ、ミラノ及びジェノアにおいては絹織物工業が繁榮した」。例えば第十五・六世紀のジェノアにおける絹織物工業に關していえば、「資本家的生産樣式に移り掛けている産業という印象が深い。原料の供給は大規模且つ綿密に組織されたシシリーからの毎年の輸送に依つて保證されていた。絹織物組合に屬する各員の手中に資本の恐るべき集中が起つた。勞働力の集中は、製造の最終過程たる染色を工場のなかに繰り入れることに依つて、又技術と原料とをギルド規制の外部に、海外若しくはリグリアの僻地に持出さうといふ勞働者の計畫に對

する政府側の周頭な警戒に依つて完成された。資本家と勞働者との嚴密な分離は、結局において近代的階級對立の明白な先鞭を附けた」のであつた。

成程イタリーの工業活動は、「第十五世紀における農業に對する資本と勞働力との非常に顯著な轉換を考慮しても」、「この期間を通じ、又第十六世紀の大體を通じて最も印象的であつた」。然し近代資本主義の大きな推進力となつたのは、決してイタリーにおける經濟發展ではなかつた。寧ろ「資本主義は、その最初の原動力をイギリスの織物工業から獲得し、直接的には中世における主要な中心の末ではなかつた」といはれている。然らば何故か。近世イタリーにおける資本主義の發展を挫折させたのは一體何であつたろうか。

「一つの明瞭に重要な原因が、例えば、貴金屬の動きであつた」。「アフリカ金の輸入が減少しつつあつた一四七〇年と、メキシコ銀の影響が氣附かれ始めた一五四〇年との間において、如何にイタリーが貴金屬の缺乏に苦しんでいたことか」。しかも「かくして惹起された資本の不足が多くの地域的要因に依つて激化された」。「ジェノアの商人は、例えば、東方貿易に基ずく利益の減少と、それに依る業界の資金源の枯渇とを誘發した第十五世紀後半におけるトルコ人の抬頭に伴なう商業植民地の喪失に依つて特に、又一五二八年迄續いた國内投資に對する慢性的な政治不安の妨碍的抑壓に依つて影響された」。後に「ヨーロッパに流入した大量のアメリカ銀が通貨膨脹を持込み、その結果イタリー勞働者の賃銀がフランス、ドイツ及びイギリスの勞働者の賃銀より遙かに急激に上昇した時」、この事實も亦「イタリーの製造業者を決定的な不利において諸外國の競爭者と對決させる」結果を導くに至つたのであつた。

「イタリーにおける通貨膨脹の慘害が激しさにおいてスペインにおける通貨膨脹に殆んど次ぐものであつたことは、第十六世紀における兩國間の密接な政治關係の結果であつた」。從つて近世イタリーにおける資本主義的發展の挫折に關しては、「對スペイン關係が經濟活動の擴大を萎縮させた有力な原因であつた」といはざるを得ない。例えばジェノア人は、財務官や傭兵隊長として資本や組織能力の重要な部分をスペイン王室强化のために提供し、國内の工業生産の擴充については敢て顧慮しなかつた。「資本家的生産樣式への轉化は」、このように、「安易な利益と魅力ある社會上・政治上の機會のために斷念されたため、事實においてジェノアの工業は衰退した」程であつた。「若しイタリーが中世末において局地的な高さより國家的な高さにおいて發展していたならば、フランスやスペインの侵入を防ぐことが出來たであろう」し、又「國家的基礎の上に立つた初期資本主義は持續と發展との一段と大きな力を持つたに違いない」。「社會的・政治的構造が從前の儘の時代においてすら恐ろしく有力な、强大な諸外國に依る支配は、必然的にイタリーを經濟上の先驅者から寄食者に變化させた」のであつた。

然し衰退は、固よりこのような政治上の理由からだけではない。例えば「中世のリグリア貴族の執拗と適應性とが、第十六世紀におけるグリマルディ家のような門閥の多方面に亘る活動を特徴づけていた」という事實からも知ることが出來るように、當時のイタリーにおいて依然として根强かつた舊階級の存在も亦「中世末及び近世初頭のイタリーにおける十分に成熟した資本主義の發展を妨碍した」重大な他の原因であつた。「通貨膨脹の時期において成功したのは一般に土地階級であつた」こと、「イタリーのスペインに對する從屬は、土地階級にとつて國内における政治的優越を强化する上に役立つた經濟上・財政上の寄生的生活のための機會を提供した」ことから、例えばジェノアにおいては、「一三三九年に支配階級として打倒された土地貴族（ノビリ・ベッキ）が、一五二八年のアンドレア・ドリアを中心とする政變を契機として顯著な回復を遂げ」、都市に定住して營利活動に從事し、富を獲得することに依つて政治權力を掌握して、遂に市民層を壓迫するに至つた程である。即ち近世のイタリーにおいて「封建貴族は、精力・氣慨及び適應性を驚く程に保存し、變化した歴史環境のなかにあつて非常に大きな力を保持することが出來た」のであつた。しかも反動勢力のこのように根强い存續は、直接的には「一四五〇年から一六〇〇年迄の時期を特徴づける諸都市における政治危機」を深大化し、結局において經濟力の退歩を導かずには措かなかつたのである。

（渡邊國廣）

ジャルル・ヴェルランダン
『フィリップ二世治下のフランドル
——經濟危機の期間——』

Ch. Verlinden, "En Flandre sous Philippe II: Durée de la crise économique." Annales. Économies. Sociétés. Civilisations. Janvier-Mars 1952 No. I, p. 21-30.

フィリップ二世治下のネーデルランドに關しては、詳細な研究がない。通例この時期は危機の時代と看做され、嘗てこれ以上の説明が試みられたといふことはなかつた。

政治の面についていへば、ネーデルランドは、フィリップ二世治下において相當な困難に見舞われていた。第一に、ネーデルランドは、フィリップ二世が劃一政治の必要から剝奪した自治權を回復しなければならない。又舊敎主義に依る統一の達成のために彈壓された新敎に對する信仰の自由を斷乎として固守しなければならない。しかもこの種の强い欲求が、當時において早くも、フィリップ二世の支配を排除しようという激情に變つていた程であつた。不滿は急速に深まり、一五六八年、遂にネーデルランドは立上つた。政治上、宗敎上の反感は、ここにおいて一擧に表面化した。戰亂は北部より漸次南部に擴大して行つた。事態を憂慮したフィリップ二世は、總督アルバ公を派遣して叛軍の鎭壓に當らせ、一五七八年、辛うじて南部諸州の